中村憲吉著

自選歌集

芽の松

現代代表短歌叢書第四篇

森田恒友画伯装幀

改造社版

自選歌集

松の芽

中村憲吉著

改造社

自選歌集

松の芽

中村憲吉著

改造社

自選歌集

芽の松

中村憲吉著

改造社

松の芽　目次

『馬鈴薯の花』時代

明治四十一年

竹（三首）……三

椿と紅梅（五首）……四

亡兄を憶ふ（一首）……六

明治四十二年

柳谷峠（一首）……七

吹上濱（四首）……八
滿ケ崎（二首）……九
野間嶽（二首）……一〇
枕崎外濱（二首）……一一
麻の香（二首）……一三
柑橘の庭（一首）……一四
明治四十三年
溪底の湯（二首）……一五
雪來る前（一首）……一六
堀内君を悲しむ（二首）……一六

明治四十四年
寒さ石（五首）……一八
薄ら夜（六首）……二〇
青葉の息（二首）……二三
峡のいろ（二首）……二四
秋のはじめ（一首）……二五
綠蔭雨後（一首）……二五
大正元年
雨の夕暮（五首）……二七
稻の月夜（三首）……二九

憂愁の都會（四首）……三〇
初冬の郊外（四首）……三三
木曾藪原（一首）……三五
夜雨（一首）……三四

大正二年

雨久花（六首）……三五
童心（一首）……三七
秋の光（三首）……三八
日沒後（二首）……三九
萠芽（一首）……四〇

御茶の水景情（五首）……四一
飛行機（一首）……四二
松本市遠望（一首）……四三
二月十日（一首）……四四
春愁（一首）……四五

『林泉集』より

大正二年

ゆふべ（二首）……四九
鳳仙花（二首）……五〇

榛紅葉（二首）……五一
赤き宮（一首）……五二

大正三年

洲崎附近（五首）……五三
峡驛の葬禮（四首）……五五
病院の庭（三首）……五六
四日月の光（一首）……五七
眉間の光（五首）……五九
蒼き渚（五首）……六一
新綠の海岸（四首）……六三

梅雨渚（四首）……六四
篠懸樹のかげ（一首）……六六
馬柵の霧（七首）……六七
山峡の夏（三首）……六九

大正四年

構橋晩景（六首）……七一
千鳥橋（六首）……七三
倉庫街（三首）……七五
草木發芽（二首）……七七
晝の燈（五首）……七八

峡の雲（二首）……八〇
淺宵裸馬の列（五首）……八一
悼左千夫先生（二首）……八三

大正五年

磯の光（七首）……八四
晝　磯（六首）……八六
鳥の裏（七首）……八九
雉　子（二首）……九一
椿の嵐（三首）……九二
春の鴉（六首）……九四

綠蔭製藥（四首）……九六
青　臭（五首）……九八
草刈舟（三首）……一〇〇
暮　春（三首）……一〇一
藤なみの花（一首）……一〇二
初　夏（二首）……一〇三
槻の道（四首）……一〇四
青靄の夜（五首）……一〇六
向日葵花（七首）……一〇八

『しがらみ』より

大正五年

歸　住（八首）……一一三

大正六年

雨　蛙（六首）……一一六

峽のあらし（三首）……一一八

夕　雨（四首）……一一九

秋　情（四首）……一二一

霧（三首）……一二三

深　夜（三首）……一二四

氷　川（三首）……一二五

大正七年

淺　春（二首）……一二七

病床惜春賦（十四首）……一二八

大正八年

春峽清音（五首）……一三五

裏山の春（六首）……一三七

茱萸樹（三首）……一三九

大正九年

初　雪（三首）……一四一

大　寒（四首）……一四二
搾酒場（二首）……一四四
油　燈（三首）……一四五
梅雨ぐもり（一首）……一四六
雨　霧（二首）……一四七

大正十年

池の家（五首）……一四八
冬　柳（三首）……一五〇
鳩　鳥（三首）……一五一
梅雨あけ（二首）……一五二

雨　池（三首）……一五四
折にふれ（三首）……一五五
白河口（二首）……一五七
雨山暮情（八首）……一五八
鷺（六首）……一六一
山坊夜話（四首）……一六四
根本中堂（二首）……一六五

自選小記

表紙及扉畫……森田恒友氏

『馬鈴薯の花』時代

竹

明治四十一年作

新酒桶を伏せしかたへに割るたけの竹紙かるく春風にとぶ

山の根のけむり立つ家の棟のうへに孟宗竹の藪しだれかかれり

灰小屋をまばらにめぐる孟宗竹に葉あひを洩れて煙なびかふ

椿と紅梅

つばき垣にたてかけ乾せる畳にし花ころび落ちて前にたまれり

櫻島すその松山松まじり咲ける椿にうぐひす啼くも

路みちの椿のはなを摘みあそび蜜を吸ひつつ我がゆく山路

さやさやし庭樫が枝の朝のかぜここだ露けく椿散りゐる

浴室の窓よりみれば湯氣かかる紅梅のはなに
散らす雪かも

亡兄を憶ふ

ふたりして過ぎし日思へば亡き兄のくさぐさ
のことが吾れを泣かする

南薩旅行雜詠

明治四十二年作

柳谷峠

山裾に松の林が遠くひらけかすめる海がかた
むきてみゆ

吹上濱

松みなが砂にうもれて稍ひくくわが眼のほど
につづく松原

海の邊にかへり見すれば濱のうへ砂高みかも
山僅かみゆ

砂をかの裾をめぐりて川ひくく夕映のいろを
海にそそげり

荒磯うみ日暮れて砂丘の松原は砂吹きつけむ
風の鳴る音

浦ヶ崎

浦ふかく干潟となれば島へわたり岬みさきへ
人かよふ見ゆ

見わたしの廣き干潟の沖にして家ふたつ三つ
あり戀島双子島

野間嶽

ふもと海雨に暮れゆく野間池はしら木棉浪邊
ともる灯が見ゆ

飛ぶとりの影も小ぐらくつつみ持ちて霧はな
がるる松の谷間を

枕崎外濱

いにしへもこの夕濱を我がごとく旅行きくる
る人のありけむ

磯鶸の啼く音をききぬ日のくれに浦回いそげ
ば暗き岩間に

麻の香

月きよし廣麻畑のふかみより人かたり行くこ
ゑぞ聞こゆる

霧ふかく濡れたる麻の畑よりいささ朝かぜか
をり高しも

柑橘の庭

柑橘のあかるく熟れし奥庭は雨ながら昼の戸をとざしたり

渓底の湯

明治四十三年作

渓の湯に仰向き浮けば吾が胸に窓越しの星が落ちつつ濡れぬ

谷崖の照路燈をくらみ影見えず足音のみに湯に下りる人

雪來る前

天地の冬さびしつつ會ひよるや沈默のくもり
を雪の散り來も

堀内君を悲しむ

ある夜は泣き居たるあとの眼を恥ぢて繕ろふ
汝れをいたしく思ひき
もの皆に響き足らはずこの頃の消なむ心に汝
を戀ふるかも

寒き石

明治四十四年作

夕づく日寒けき崖を石のいろの上に物うごく
小鳥にてあり

夕ちかき枯野あゆめば足のへの眼にさむき石
の肌かも

石の面にふるるそよ風かれ草の影のゆらぎを
うすく置くかも

野にのこる日の薄らひの淋しさを石に觸りつ
き泣かまくするも

眞悲しき枯野のなかの石を吹く風の歔欷に草
のなげきよ

薄ら夜

亡友の墓を展して信州に泊る旬日。哀愁新なり。
四月九日歸路深宵輕井澤驛に下る。微雨はれて
月淡し。予は初めて高原薄夜の情趣を知る。

新芽立つ林にこもる家のかべ月照り來ればしるけく浮くも

しらじらと夜の更けゆけば新芽ふく森にこもりて寢ぬる夢を思ふ

宵ふけて吾がゆく野べを草の家にくくと鷄啼くあはれ月夜を

亡きひとを思へばさびしも高はらに風ほの白き夜のくだちつつ

高原にこのうすらなる夜をふかみ泣きつつ玆に消なばとぞ思ふ

なみだ盡きて頬に吹きくる風ごこち夜の原のものに和みをるかも

青葉の息

日かげとくに消ぬるをなほも向か山のほのけき色に鳴ける蟬かも

山中のしづけき町に蟬の音の四方よりそそぎくれ入りにけり

峡のいろ

蒼黒く暮れゆく峡にこもる瀬にさき入りけれ
ばこの世にはあらず

谷の奥に蒼く消ゆべき旅の身をすぞろはかな
くかへり見にけり

秋のはじめ

秋づけば水際のくさに丹の花のこもらふほど
の繼に遇ふかも

緑蔭雨後

入日映ゆる濡れ葉のかげやもの云へばわが持つ傘にふるへやさしも

雨の夕暮

大正元年作

雨のいろと青葉のいろに浸りたる今日のまなこに日の暮るるかな

夕ぐれの雨をひさしく見つめたる吾れのまなこよ冷たかりけり

道そばの雨に暮れ行く木の間よりちちと短く
とり啼きたちぬ

雨やみてやがて螢の見ゆる野をわが人力車ひ
とつ鳴りて行くかも

雨まじり風吹ける夜の山かひの底ゆく我れは
小さなるかも

稲の月夜

ひとり行くこの月の夜に見えくるはみな吾が
知れるひとの家かも

稲のつゆに濡れつつ歩む夜のはだへ座ろにひ
とに寄りたくなりぬ

かかる夜のおぼろを行けば遇ふひとの皆なつかしく草かをるかな

憂愁の都會

物の音もひとゆく影もおほほしく曇りへだたる街べを行くも

にでて曇りを行けば我が知らぬ顔のみ人のあまた來るも

舗石の上に曇影ふみつつたまたまに己が足の音にさめ返るかな

何はなく寂しき街にぞろぞろと人ながれつつくもり行きけり

初冬の郊外

ひさびさに街出てくれば郊外に落葉せるもの
は盡くせりけり

冬がれの林のまへに燃ゆるごと見の惱ましき
青菜畑かも

足とめて靜かになれる土手のうへにひとの足
の音のよりて來るかな（向島）

土手したの小き池面にどこよりか煙の來ては
撫でゆく寒さ

木曾藪原

汽車が來て峽間の驛にとどまれば罐鳴りする
が山にさびしも

夜雨

雨ぬくきかかる夜ものの音の立たばとほく尾
をゆり消え行きぬべし

雨久花

大正二年作（四月迄）

夕暮るる家に來りて亡きひとの話にわれは眼
をつぶるかも

道々くの秋野に花はゆらぎたれど尙眼をとぢて
見たきものあり

花をゆりて淋しく吹きし野のかぜに人行けり
しが影のごと思ほゆ

軒の端は夕べそよろと歸りたる人のあるかに
風鳴りすぎぬ

ひと逝きて三年と云へばその母と夕べしづか
に居るこころかな

このゆふべ母のまな子となりたれば心ことご
となみだに濡れぬ

童心

乳房ある御ほとけ見れば幼な兒のをさなごこ
ろにうれしくて泣かゆ

秋の光

野ははても我れはも行かな風ありてはつ秋の
ひかり吹きそそるかな

蝶つきて身をめぐりゆく我がそばを衣擦れの
音の狂ほしきかも

手はわれは握るとしつつ氣のつきぬ道にゆれ
たる我毛香のはな

日沒後

たまたまに草にこぼれし酒の香の湧きたつ風
の吹き行きけるも

草の上の小雨のごとく鳴くむしに身も濡るるがに聞き入りけるも

萠芽

橘花のいまだ含めるわが小女にかすかなる香を聞くうれひあり

御茶の水景情

ほり底に舟木隠りに消えしころその木ぬれにはは砂吹きしかも

秋淺き木の下みちを小女らはおほむねかろく靴ふみ來るも

街なかのこの塹壕ぞこの水ぎはに小舍ひとつ
あはれ見えて居るかな

街の砂の日ごと降りきて久ならむ壕小家の屋
根に積り居る見ゆ

壕ぞこに小舍の子ひとり遊びゐて何時までも
經てどのぼり來ぬかも

飛行機

なか空ゆ音ちかづきて水のごとき光りのなか
に飛行機が見ゆ

松本市遠望

雪野の原とほきくぼみに晃らかに夕さりくれば
街の灯が見ゆ

二月十日

伽羅沈香を買はむと市に出でし夜騒亂のある
を見に行きにけり

春愁

かりそめの身の過失のことごとく世に惱しく
春立つらしも

『休泉集』より

ゆふべ

大正二年作（九月以後）

倉の戸に畫きのこる的の墨のいろ弓あそびせしむかし思ほゆ

ゆふ庭の木かげを見れば雛の鶏言葉をやめて静かなるかも

鳳仙花

葉がくりに花の柄ながき爪ぐれは人の粧姿に
似てを愛しも

葉の雫花にこぼれて光るだも座ろに堪へず君
が眼を欲り

榛紅葉

ゆふ庭に榠樝のにほひ熟れゐたり君によりつ
つ然か思ひたり

かはたれを我れに來向ふわが少女やや赤面み
ゐて憎からなくに

赤き宮

ひろ庭を宮居へまゐる静ごころ白きひかりの
天より降るも

洲崎附近

大正三年作

廢れたるごとき廊のしろき雨うみ鳥は下りて
路に飛べるも

廊ごしに海は見えねどしらじらと雨ふる空が
ちかく見ゆるも

梅雨ふかき廓にそへる堀のみづ芥を浮けて潮
香かなしも

海ちかく都のはての畷みち雨ひそやかに行き
にけるかも

養魚池の梅雨深みかもしつとりと岸の無花果
樹葉を浸したり

峡驛の葬禮

宿驛みち山のしたより葬れつの白旗ならび笛
吹き來るも

葬列のぐんじゆうの顔日に向きて驛路をきた
る赭く眞面目に

とぶらひを道べにおくる女どもみな日に向き
て泣きつつ立つも

うまや路の屋並みの上の山畑にとぶらひ出で
てのぼりゐる見ゆ

病院の庭

樹に滿つる光を見れば清稚きをとめのいのち
死なすに堪へんや

しげり葉の頭にさやる徑に入り鳥のこゑにも
涙ながすも

泣きながら母と我れとは病室のせまき疊に夕
餉せりけり

四日月の光

あをき星水田のそこに搖らぎつつやや春めき
し風ふき來る

眉間の光

新芽立つ谷間あさけれ大佛にゆふさりきたる
眉間のひかり

夕まぐれ我れにうな伏す大佛は息におもたし
眉間の光

暮れそむる淺山かげに大佛の膚肌はあをく明
からんとす

大佛の乳見そむれば松の間が眼にわづらはし
松葉こまかに

大佛の肩のうしろにおのづから夕山ひくく沈
みたり見ゆ

蒼き渚

旅やどり夕なりしかば幾重にも遠しらなみの
渚は蒼く

はかな言ゆめうつつには信ぜねど在るにあら
れずあをき潮騒

ゆふ蒼きなぎさの浪にあげられし微温き玉藻
を取りて嘆くも

潮騒のゆふ香はぬるく身をそそれ戦ひじとは
すれどなぎさ潮さゐ

潮かぜの夕かぎりなき沖つなみ眞帆ただ一つ
ながれて行くも

新緑の海岸

磯べには黄ばめる麥へ藻の香吹きゆたかに吹
きて夏ならんとす

宿かへて錢やや乏しおぼつかな向うの岬に蟬
の鳴きをり

移り來ていくだもあらず春蟬はみさきの松に
おとろへにけり

今日もまだ雨ふる岬の森かげにとまりの舟が
煙立てをり

梅雨渚

海を隔てとほき箱嶺へ落つる日の雲よりこぼ
れ濱のあかるさ

おもむろに磯におちたる浪の音ゆふ凪ぎ海の
潮のふくらみ

雨ながら背戸の濱べに蟲鳴けりあはれと人に
告げやらましを

裏濱に小寄せに寄せし夜の浪は遂にあらしと
なりにけるかも

篠懸樹のかげ

篠懸樹かげ行く女らが眼蓋に血しほいろさし
夏さりにけり

馬柵の霧

おく山の馬柵戸にくれば霧ふかしいまだ咲き
たる合歡の淡紅はな

こんこんと馬柵をくぐる水きこゆ草の中より
霧立ちながら

しかすがに諸葉をとぢし合歡の木の花より霧
の雫きゐる見ゆ

霧ながら明るく濡れし馬柵の戸をとざして入
ればふかき松山

朝鳥はいまだ啼かねど霧ふかき山にはすでに
人の居るこゑ

霧ふかき馬柵のうちは靜かなり馬ふたつ口を
寄せて擦りゐる

森のなか朝來てみれば草むらのいづみに沈む
白飯のつぶ

山峽の夏

朝霧の峡のそこなる屋なみには白壁もみゆ山
ちかみかも

夕まけて風ひやびやし峡のそこ瀬音たち來も
うらの小川ゆ

夏の夜をこの峡ふかく旅の人行きやめざらむ
星の明りに

構橋晩景

大正四年作

大河口の夕燒がたの船工場音をやめたりその
重きおとを

ひろびろと河の口より夕映す構橋にちかづく
大き帆のかげ

ひろびろと河の口より夕ばえす橋にむきたる
街のとほくに

夕づく日構橋のなかを行けりしが我が足もと
に帆を巻く音す

橋詰の街樹に吹ける海のかぜ夕かたまけて風
ぎにけるかも

いつくしく海のゆふ映す橋づめの一本路樹に
ねむる籠鳥

千鳥橋

倉庫堀に小夜潮ふかしわが眼透し眼にみるも
のが白き架け橋

黒ぐろと倉庫あひの堀の隠り船しはぶき一つ
寒けかりけれ

倉庫かげに夜ぶかくこもる堀おほし漕ぎ出でて
きたる灯火荷船

河岸倉に人のまだ居る聲さむし岸にみちたる
さ夜の潮香に

河岸船に天窓あきし灯のあかり女のぞきて物
を云ひつも

さ夜ふけの星居幽けき千鳥橋他の橋へうつる
寂しき人か

倉庫街

深川に夜を來つれば街ひくし潮かぜをおぼゆ
近くの空に

とつぷりと日暮れの後の倉庫街馬ひとつ居て
尾をふるあはれ

倉かげに馬は暗しもしみじみと尿を終へて蹄
の音すも

草木發芽

開けはなつ障子はひさし庭のもの皆葉に生ひ
て居たりけるかも

小庭べに若芽ひらくはすくなくも半日待たね
ばこころ憎しも

晝の燈

日にけに光をふふむ風ふけば息なやましく夏
さりにけり

うとうとと眼にはおぼろに光るもの甍の上を
吹きにけるかも

日並べてみんなみ甚く吹きぬれば思にあまる
物言ひにけり

思ひ出て幽かにねたむ葉がくりの晝の燈光の
顯しけなくに

みなづきの光眼いたし大道に鮪をころす鳴き
ごゑ聞こゆ

峡の晝

山の根へ青田のうへの風の筋がほそぼそと通ふ眞ひるなりけり

山かひの水汲みぐるま田のなかに水こぼす間も物を思はしむ

淺宵裸馬の列

灯なかより埃ののぼる宵あさし十字街にくれば汗ながれけり

列りて行く馬みな裸馬なりほこり立ちたる灯のなか行くも

街辻の燈火のなかを疲れたる馬の太頸ならび
ゆく見ゆ

馬のむれの馬の一匹立ちとまり街のあかりに
埃掻きけり

ありありと遠き灯つづく街辻路に馬とどまり
て面大きなる

悼左千夫先生

曇り風ふみ月の風は吹けれども土にさみしく
君が音ぞせぬ

くもり風うつつに吹きて居るゆゑにことごと
く物の音の遙けさ

磯の光

大正五年作（八月迄）

身はすでに私ならずとおもひつつ涙おちたり
まさに愛しく

もの思ひおもひ敢へなく現つなり磯岩かげの
うしほの光

わたつ海の後の岩のかげにして妻に言らせる
母のこゑすも

岩かげの光る潮より風は吹き幽かに聞けば新
妻のこゑ

みじか世のいのちと思へば漲らふ潮のひかり
も在りがてぬかも

磯榁の樹皮こばるる日のさかりおのづから悲
しひとり思へば

みなぎらふ潮のひかりはおほけなし眼を開き
て居て如何にわがせむ

晝磯

來しかたの悔しさ思へば晝磯になみだ流れて
居たりけるかも

おぎろなき息をもらせり内の海八十島かげに
水のひかれば

光る海の珠ひろひつつ磯かげの山かた附きて
行かす母かも

磯を行くひまだに母はあはれなり我が新妻を
愛しみたまへり

おほけなく涙おちたり生ありてあり磯の珠も
母と拾へば

たまさかに歡ぶわれと思へかも晝磯のうへに
涙とどめざらむ

島の裏

島山を下ればさみし隱り江のむかうに暮るる
ふかき松山

山かげの海べを見れば松の間にゆふべ寂しく
草を刈る人

ひた寂し聞きつつ居れば松山の夕海岸に草を刈る音

このわたり家居は何處ぞ草かりて磯松山に人かくれたり

妹として山にて聞けばかすかなり山した海のゆふ潮のおと

はなれ島磯わにのこる夕光かつがつ妻が言惜しみける

山かげよ見ればはろけく夕しほの八重折る海はいまだ明かり

雉子

春雨のこの降る雨の木がくりに雉子啼くなり
遊べるらしも

夕尾嶺にとほく雉子の啼きたる楮枝がくりに
相逢ふならむ

椿の嵐

洋館の椿をゆする疾ち風ピアノ鳴りつつ彈音
はやし

限りなく春の嵐に吹きゆするる赤き椿は眼を
疲れしむ

葉がくりに蟲を求めて鳴く小鳥たえず秀枝へ
鳴き移る見ゆ

春の鴉

春あらし樹々の光りて塀のうへにくだれる鴉
啼かざりにけり

近づきて塀のうへなる眞寂しき晝の鴉を見た
りけるかも

街なかの埃しぬぎて來たるらむ光りつかれて
居る鴉はも

赤根さす晝に啼かざる大鴉もの忘れ人に似て
したるものか

もの蔭の春し寂しも羽根のおと亞鉛の塀に鴉
くだるも

春眞昼もの蔭にてし啼くからす數多はなかず
眞うらかなしも

綠蔭製藥

若葉深くわが入り來れば製藥の匂ひしたりぬ
わが眞近くに

黄に搖るる若葉のなかの眞日の照り製藥のに
ほひ焦げ臭くおぼゆ

藥の香はげしく吹けばわか葉より綠素を吐き
て吹くここちすれ

春ふかき若葉かげより製藥の匂ひのするは寂
しかりけれ

青臭

春すぎて若葉靜かになりにけり此の靜けさの
惜しからめやも

眞日透きてわか葉かさなる深みどり匂ひした
しもわが衝く息に

我がいのち怪異に目覺めぬ深わか葉うつし身
の肌に青くひかれば

潜まりて小鳥は啼けり深わか葉蟲のうまるる
臭氣を感ず

わか葉より小鳥墜ちつつ羽ふりて相交歡べり
その下ぐさに

草刈舟

おほ君の御城を見ればみんなみの御ほりの岸に草長けにけり

五月雨の草しげれれや大御城み濠に居りて草を刈る舟

み濠べに雨間あくれば草積みて棹差しかへるひとつ舟かも

暮春

春ふかく二階に住みて忘れたり人のみな行く寂しき土を

春ぼこりいく日吹きたる道ならむ今朝見れば
地肌露れにけり

鋪道の並樹わか葉に風わたり明るき街となり
にけるかも

藤なみの花

日のくれの障子あかりに埃吹きひさしく思ほ
ゆ床の藤なみ

初夏

このゆふべ巷街のうへに愛らしく夕焼ぐもの
ながるる見るも

初夏の庭は樹ぶかく暮れにけり水のおとこそ
聞かまく欲しき

槻の道

大並樹槻よりわたる若葉かぜ我がはなひれば
寂しくし覺ゆ

煉瓦家の深きかげ行けば若葉かぜ濃く吹き渡
る槻の大幹

ゆふ日さす槻の葉かげに教室は戸を鎖したり
深きゆふ戸を

槻の道ゆふ日が霧ればもの蔭に醫科大學の鶏
なきにけり

青靄の夜

鋪道の家壁のかげの青き靄夜くだちながら人の居るこゑ

あをき靄ながれて夜はふくれども鋪道のうへはまだ乾きたり

乾きたるこの鋪道に錢おとし四邊にひびく靄のふかきに

街なかに水欲しくなり小夜ふかし乾ける道を行きがてぬかも

街なかに風吹きたれば青き靄ちかくながれて居たりけるかも

向日葵花

おほほしく曇りて暑し眼のまへの大き向日葵
花は搖すれず

曇り彩すでに深かけば日まはりの大輪の花は
傾きにけり

あからひく大向日葵のもとに立ち息づき餘す
ふかき曇りを

くもりたる四邊を聞けばひまはりの花心にう
なる山蜂のおと

ちまたより埃にほひて流れたり曇りのふかき
この庭ぬちに

なやましく漸く風の吹きたれば重くゆすれし
向日葵のはな

夏の土ふかく曇れりふところに蟬を鳴かせて
わらべ行きたり

『しがらみ』より

歸住

大正五年作（八年改刪）

山かひの秋のふかきに驚きぬ田をすでに刈り
て乏しき川音

山かひに歸れる我れをおもひたり冬川のみづ
乏しらに見ゆ

日の暮れて我家につけば家うらよりさみしき
川の音のきこゆる

峡の家に古りし洋燈を今もつれり久びさに父
と膳をならぶる

山家住み夕さりくれば今にして諦めがたき寂
しさ湧くも

今日も出て眼に見るものみな山なりひと日ひ
と日と冬のさみしさ

朝の間はこころに忘れかぎろひの夕べとなれ
ば悔いつつぞ居る

忘れたる十呂盤算になづみつつ村びとの顔を
日日に見知りぬ

雨

蛙

大正六年作

土間のうへに燕くだれり梅雨ぐもり今日は用もちて人の來らず

消息をあまた書きしが物云ひて言葉つたなき寂しさ湧くも

めづらしく庭に鳴けるは背戸川のかはづが庭にのぼれるならむ

忘れたる晝餉にたちぬ部屋ごとに暗くさみしき疊のしめり

いそがしく蛙は庭に鳴き止みぬすなはち雨の家めぐるおと

雨のおと蛙が鳴くに箸とめぬ障子のそとに鳴くところ近し

峡のあらし

夕焼けて峡間おぼほしく明るめり風呂をあがりて氣倦るき我れは

暗がりて山風ちかく田を吹けば田に居るひとを出て呼びかへす

夕がらす山にも啼かず戸をはやく締めて夜にいる大あらし雨

夕雨

夕ぐれは端居の鍋にものの焚きて食すによきほど雨したたれり

夕さめの寒からぬほどは石にふり濡れそぼちゆく鶏頭のはな

たまさかの雨におちつく我がゆふ餉妻にくはしき物言ひにけり

秋のあめ外暮れがたみ行く人の傘のうへにはまだ明りあり

秋情

夕かげの小藤がもとの屋敷川せせらぎ澄みて秋づきにけり

端居よりとほくし見ゆる倉間のコスモスの搖れ秋づきにけり

眼にとめて吾れも寂しき日暮れがた刈田のうへに穂をひらふ見ゆ

おのづから栖におくれたる庭鳥の梯子にのぼる夕寒みかも

霧

朝ゆふの息こそ見ゆれもの言ひて人にしたしき冬ちかづくも

霧暗く道路にふれり顔向きてつぶさに人と言ふがかなしさ

うしろより町への用を言ひしかど霧にかくれて荷ぐるま行くも

深夜

家びとを皆寝しづめていち日の息やすらぎぬはじめて我れは

夜おそく仕事を終へて安けかれ妻が出し置ける夜食をしつつ

大き家ふかくねむりて静かなりをりをり棟の木のしとる音

氷川

雪山より風吹きつげり氷りたる河瀬の岸のいく朝とけず

おしなべて寒き風かも河の瀬の五百箇岩むらは濡れてこごれる

足もとの凍つく夕べとなりぬれば山した川の音の乏しさ

淺春

大正七年作

夕ぐれの北山にたつ曇り風いまだも寒し雪をはらみつ

向か山の夕かげの雪に霧だちて降りゐる雨の春めきて見ゆ

病床惜春賦

眞夜なかを裏の鋤田に鳴くかはづ今宵はじめて聞きのかなしさ

眞がなしき命つがむと病床にひたすらになりて物をわすれつ

春なかば山に殘りし雪をとり我れのつむりは冷されてあり

病室の慰めにとてはじめて活けられたるは白梅の大きなる蕾なり

梅の木の畑に雪のふかくありし昨日と思へど久しからしも

暗くせし我が病室にいく日か我が子を見ざる日をすごしけり

枕頭の洋盃には清冽なる水に菜の花と小菫草との挿されたる、裏田より妻が摘み來たりけむ

鋤きかへす裏田の土にこぼれ咲く菜たねかあらむかはづの鳴くも

惡熱下りて病室とみに閑あり

寢てきけば背戸川とほる芹摘人の草履のおとは水淺みかも

戸外惜春の心頻りに堪へず

物がなしくやまひの床に活かりたる山躑躅ば
な照りあかりたり

川原べの石の間より萠えいづる小ぐさの芽に
も聲あれなとおもふ

つぐみ鳥山を出入りて啼くこゑす鋤田はすで
に水引けるらむ

少しく障子を開かしめて晩春の
野山を眺むるに

我がまなこ衰へにけり若葉せる山にむかひて
只おぼろなる

淺みどり眼ぢかき山もおぼろなれど其處にす
がしき川おときこゆ

病臥五十餘日はじめて沐浴清淨、
床を別室に移して

たまたまに障子をあけて吹き通す疊のかぜの
夏めきにけり

日のくれの山かげふかき川瀨よりいちはやき
夏の河鹿鳴きたり

春峽清音

大正八年作

手をとりて云ひがたきかも現し世にいのちを
死なず君きたりたり（重病癒えし百穗畫伯の來遊を悅ぶ）

冬山の春にむかふを一人して見むとおもふに
來つる君かも

春あさき峽はともしき水のおと此處に住む我
れを思ひたまはね

春山に敷ける落葉のぬくむごと君に會ひてぞ
胸のぬくも

君を送り國のさかひの山越えのふかき峽路に
わかれけるかも

裏山の春

裏山の樹にたつ霞いや日けに眼ぢかくおほく
なりにけるかも

うら山の芽吹きをはやみ殖えてくる春どりの
こゑしじに悲しも

日ぐれまで兒を遊ばする山かげの紫雲英田の
うへ月淡くあり

山川の風吹きあげて搖るるまで若葉を盛りぬ
あはれ裏山は

山したをしづかに落つる堰のおと山よりくだ
る鳥ひとつあり

裏山の綠ととのひ山したの川ぞこに石の見ゆ
るしづけさ

茱萸樹

河ばたに白き芽を吹く茱萸一ぽん子供來りて
虐げて去れり

春と云へば一度しひたげし河原茱萸樹えだを
起してまた葉をつけぬ

乏しらに井堰がうへの茱萸樹のはな河鹿鳴く
べき時にいたりぬ

初雪

大正九年作

この雪に草鞋のあとをのこしつつ酒藏の男み
づ汲みてとほる

聲かけてみづ擔きとほる男らの向うへいそぐ
脣さむし

酒つくるみ冬とおもふ心せはし雪ふる今朝の
洗場のうた

大寒

大屋根も小屋根も雪のしたたらず垂氷みじか
き寒き日つづく

部屋ごとの朝の炬燵に釜場より大十能に火を
はこばしむ

樽負ひてはいる人あり小蓑より乾ける土間に
雪をこぼして

居すくめて朝なさ顔をふきてやる幼兒ふたり
頰霜やけぬ

搾酒場

夜を凍みる古き倉かも酒搾場の燈のくらがり
に高鳴る締木

槽のした夜ぶかき瓶に下りて汲む搾りたての
酒粕くさきかも

油燈

桂の輪に油燈ひとつ懸けてある酒藏のおくに
夜ぞふけたる

燈のかげに胴ふとくならぶ醪桶をちこちに湧
きて音のしづけさ

天井に鳴くねずみあり大桶のもろみの泡に燈照らし居れば

梅雨ぐもり

梅雨ぐもり深くつづけり山かひに昨日も今日もひとつ河音

雨霧

夕暮れの峡にひろがる梅雨の雲つぎつぎに飛ぶ山をはなれて

五月雨の山ぎりふかく田にくだり蛙も鳴かぬ夕べとなれり

池の家　大正十年作

池の家に夜かぜつのりぬ宵ふけて屋根一ぱい
に雨のふる音

秋ふかき寒さに入りぬ宵よひの癖となりつつ
雨ぞ降りける

夕焚きし風呂はそのまま入るものなし二たび
入りて寝につく我れは

柱なる幼きものの紐ごろも此のあひだより脱
ぎて掛けあり

池どりの啼かぬ雨夜かもつま兒らの行きし山
國雪かもふらむ

冬柳

冬池の水ゆたかなり垣の根にさざ波ちかくなりにけるかも

なまけつつみ冬にいりぬ鳥さへも池の眞なかに下りてかづくに

冬にいる寂しさもてり池水のひたに照りかへす二階に居りて

鴉鳥

夕かたの風をさまりし松原の片かげに池のふかく澄みたる

冬されば散る木ともしき門の池ゆふ早くより
月のかげあり

朝ゆふの池になづさふ霤の氣の岸のふゆ木に
のぼるこのごろ

梅雨あけ

梅雨明けの雨あらく落ち雲にもつ雷のおとは
大きくなれり

梅雨雲にかすかなる明りたもちたり雷ひくく
鳴りて夏にちかづく

雨池

さみだれの池ひろみかも夜のかはづ岸に鳴く
なるこゑの乏しさ

雨の夜は池にひたれる樹につきて僅かに鳴く
も蛙のこゑの

雨あふるる池よりきたり鳴くかはづこの砂庭には
は草木ともしも

折にふれ

抱かれたがる子どもを強ひてあゆましめ夕の
散歩をかなしみて居り

散歩といふ態わざごとを我れすれど故さとの
村の人はせざらむ

父われの世わざに迷ふ寂しさを知らざる子ら
の手をひき遊ぶ

比叡山

白河口

比叡山の白河村は軒につむ柴たかくして川くぐりたり

春にむかふ山家のうしろ櫟生の木立にまじる
白梅のはな

雨山暮情

日の暮れの雨ふかくなりし比叡寺四方結界に
鐘を鳴らさぬ

雨雲のうへに日暮るれむかしより大比叡寺は
鐘を鳴らさず

雨霧の吹き朧ろかにせる杉の秀に伽藍の屋根
は大きく暮れつ

夕鐘はふもとに鳴りぬ白くもの結界のうへに
かすか聞ゆる

傳教大師入山禪居の心を
しぬびて

朝ゆふは眼もとにひらく琵琶の湖山のうへに
坐ししさみしき塑

夕されば杉のしづくに朝くれば朝どりのこゑ
に耳のかなしく

夕されば いにしへ人の思ほゆる杉はしづくを
落しそめけり

山に坐して湖をひろく見朗かに大き寂しさに
入りたまひけむ

鷺

朝の戸を開くるすなはち眼のうへより雨霧を
吹く大杉木立

しののめに山ふかき鳥を聞くものか比叡寺に
ゐるを寝て忘れたる

寝てきけば幽かに澄めり起きてくれば山坊の
庭の朝の鶯どり

大杉より雨ぎりの吹き絶え間なし幽かみじか
き鶯啼きてをり

山のあめ霽るにいたらずまた降りて鶯どりの
こゑ寒くしなりぬ

山こぞり雨暗からしこの庭の明るみに居て去
らぬ鶯どり

山坊夜話

山坊の夜語り更けぬこの僧に精進食をたもつ
歯のきよくあり

山のうへに世をかなしみて下りて來ぬ僧の多
くが山に果てけむ

人の世の生きおなじからず昔より世にかくれ
たる命のさびしさ

山のうへに春さむく僧の行き交へり黒衣ふく
れて白き襟卷

大杉に雨ぎりの湧きゆゆしけれ伽藍の檐を直にかすめつ

いちじるく根本堂の庭につむ雪を消ちつつ雨霧立ちぬ

松の芽　終

選後小記

○

自選歌集で而も歌數に制限あるものの編纂は、容易なやうで實は案外に厄介なものである。普通の歌集ならば、歌數がほぼ一集を爲すに足るほど溜つたものから、之れを選して、適宜に自意に滿つるやうに處理すればよい。因より之れも自選集に違ひないが、その作歌年間が比較的に短いから、歌集編纂當時の鑑賞力により大體自選の標準も簡單に定め易い。

併し之れが長い十數年間に亘る作歌からの自選となると、さう簡單には行かぬ。例へば現在の自己の鑑賞と好尚とのみに執して、自選を行ふとすれば、夫れは恐らく最近の作物を多く採錄するやうになると同時に、集を一色に塗つて自ら過去に閲した心境の諸種相は、之れを集中に沒却し勝ちになる。反對に作歌上の自敍傳でも作るやうな氣持で、之等心境變化の特殊

相を闡明するやうに自選するとすれば、今度は自意に滿たぬ拙い厭な歌をも屢々採錄せねばならぬ事になる。作歌上の苦悶も自臭も未熟も醜さも、みな消すべからざる自己の過去相には相違ないからだ。夫れに當時の作歌の裡に多少でも眞實性が今猶閃いて殘つて居れば、作者としては之れに一種の愛着を感じる。卽ち生るる力の薄弱だつたこの眞實性に、改めて手を加へ、藝術品として強く生かしめたいと云ふ氣が起つて來る。

○

普通の歌集ですら之れを編んで世に刊行するとなると、日常衣を外出衣に着かへるやうな氣がする。況して十數年間の作歌から、尙も數を限つて自選することになると、更に社祢を着けたやうな堅苦しさを感じ易い。それに自選の標準決定には前記のごとき惑ひがあるので、存外この集の編輯に厄介を感じた。兎に角現在の予の鑑賞力から、稍我慢出來る程度のものを

標準として、各年代に亘つて、その時々開拓に苦勞して來た境地の歌を選んで、多少でも予の作歌上の過去相を表し得るやうにもした。因より改刪を加ふべき點には、その歌の特徴と本領とを失はぬ程度で、手を加へたものがある。これは舊作物の根底に眞實性の芽生さへあれば、何時その部分的瑕瑾が除かれ、藝術品として成長しようと、時期の問題は大した事でないと思つたからである。

總て以上の訣からこの自選集には多少拙いと思ふ歌でも、當時の特質を有して居るものは、我慢出來る程度で之れを採り、反對にまた自ら好む歌でも之れを態と採錄しなかつたものも多數にある。殊に拙くても採つたものは『馬鈴薯の花』時代に最も多く、『林泉集』時代はやや減じ、『しがらみ』では反對に採りたいと思つた歌で採らなかつた歌が最も多くあつたやうである。

○

最初は『馬鈴薯の花』時代で六七十首、『林泉集』で百二三十首『しがらみ』で百六七十首を採る豫定で選びはじめた。併し選の結果では、遂に『馬鈴薯の花』時代八十五首『林泉集』百四十五首『しがらみ』百二十首となつた。

『馬鈴薯の花』時代の歌が豫定の選數よりも著しく增加したのは、同集に載せなかつた當時の歌をも新に加へたにもよるが、また別な事情にもよる。卽ち同時代は予の作歌の初期に屬して居り、其處には今日振り返つて見ても、予に種々反省の資を與ふるものが有るので、予はこの予自身の初生素朴な姿を今少し深く振返つて見たい氣がしたからである。予の歌を讀んで頂く人々にも、それが餘りに稚拙で迷惑であらうとも、この初期の歌から味つて貰へれば、予には大變有難いのである。

予が始めて短歌の趣味を解するに至つたのは明治四十年ごろ、鹿兒島の高等學校で、信濃人の故堀內卓造君と交るに至つた頃からである。堀內君は當時すでに左千夫先生に師事し、今の島木赤彥君や齋藤茂吉古泉千樫君とも夫々親交作歌して居たので、予も同君と交るにつれて自然と『萬葉集』や、子規、左千夫、節及び『馬酔木』の歌について知る機會を得た。實を云ふと、予は夫れ迄は世間の短歌と云ふものを讀んで、殆んど面白いと思はなかつた。何うしても空々しい拵事と云ふ感がして厭味だつたのである。之れは予にとつては極めて自然な事であつた。當時雜誌や刊行本で、世間の眼にふれる歌と云へば、新詩社乃至竹柏園風の歌に非ざれば、所謂御歌所派流の歌であり、また時々學校で習ふ教科書に採錄された歌にしても、皆かの古今集の脈を引いた歌のみであつたからである。

予は先づ萬葉集の日竝皇子舍人の挽歌例へば『御立しし鳥の荒礎を今日見れば生ひざりし草生ひにけるかも』『朝日照る鳥の御門におほほしく人

音もせねば眞うらかなしも」や、子規子の「藤の花」左千夫先生の「金閑寺」の歌あたりから感服しはじめて、次第に深く歌に興味を感じるに至つた。遂に堀内君の勸めで始めて「竹」の歌數首を作り、左千夫先生に送つて見て頂くやうになつたが、これは明治四十一年始頃（或は四十年末かも知れぬ）の日本新聞に、先生の奬勵の辭を付して選錄し貰へた。今から見ると氣恥しいものであるが、其後數年間も歌詞を整へるには、指折つて五七五と語音を數へて、漸く歌を爲したほどの遲鈍な予にとつては、その年間に拓かれた予の歌境を振り返つて見ることは、今更意義がふかい。故に予は最初歌集にのせない初期の物を探して、之等に選を及ぼしたいと思つた。古い歌稿は鄕里の家にまだ保存してある筈だが、之れは予自身で探さねば分らぬので、切めて日本新聞にのつた歌でもと思ひ、平瀨泣崖君に依賴し、故望月光男君所藏の同紙の切拔をば借受ける心算であつたが遂に捗らなかつた。只偶然にも『しがらみ』編輯のとき探し出して來た、古手帳のうち南薩旅行記があり、そ

のうちから「滿ケ崎」三首を選んだ。猶記憶によれば當時「雨雲は櫻島の背にい往きかくろふ」流の寫生に志した萬葉張りの霧島や櫻島等の歌も少しはあつた筈であるが、今夫等に選を及ぼし、自ら更に詳しく過去を省み得られないのは遺憾である。次に「椿」の終三首、「枕崎」「柑橘の庭」「麻の香」は『林泉集』編輯のとき補遺した歌だが、年代順ここに採錄した。

○

『林泉集』からの選數もまた豫定より超過した。これは『馬鈴薯の花』時代の歌が增選されたために、均衡上增選がこの集にも及んだ自然の結果でもある。併し他面から見れば、予が一番歌を勉强してゐるのはこの時代である。怠け勝ちな予には出來歌數が甚だ少い。『馬鈴薯の花』は久保田柿人君（今の赤彥君）との合著で、柿人君のは初期の歌を收錄して居ないうへに、（同君初期の歌には多くの佳作がある）嚴選に過ぎるほどになつて居る。

之れに對して予の歌は、當時持合せの歌を悉皆曝け出したと云ふ慨然な有様であるが、夫れでも歌數は約六年間で僅か三百五十五首に過ぎぬ。『しがらみ』は五年間で五百五十九首。故に之等に較べると『林泉集』の四年間未滿の五百六十一首は一番作歌數の比率が多い譯である。歌數で勉強の程度を云ふのでは無いが、この時代に我々の仲間には種々重大な刺戟があつた。左千夫先生は大正二年七月末蓋然と死逝かれた。赤彦君は信濃から東京に移住して、新にアララギの編輯に力を加へた　餘命幾何もなきを知りながら長塚節氏は、歌に興趣を新にして沈痛なる「鍼の如くに」を作りはじめた。また百穂畫伯は「七面鳥」を描いて予等を感奮せしめた。之等の影響が勿論予にも及んだに違ひなく、同時に予自らの身事にも種々變動があつて、夫れがおのづから歌作に自己の情思をもらす機會を多からしめた。

○

今予は『馬鈴薯の花』及『林泉集』に對して之等の愛着があるとしても、若しこの自選集に歌數の制限なく、又その自選の標準を單に予の現在の好尚のみに置くとしたならば、予は恐らく『しがらみ』から最も多くの歌を選んだであらう。故に本選集では『しがらみ』からの選歌について予は此處に一種の困惑を感じた。もし同標準を以て公平に、『しがらみ』から自選してくれば、折角『馬鈴薯の花』『林泉集』から選んだ歌を、ずつと削減して了はねばならぬ。反對に右二歌集の選數を生かすことになれば、『しがらみ』よりの選歌を數に於て甚だ不均衡に減じねばならぬ。

『しがらみ』は昨年刊行して、漸く半歲を越えたばかりの歌集である。予は他の二歌集について感じるほどの過去の隔りを、この歌集について感じない。加之その一部分は、今日尚ほ引續いてゐる予の作歌の道程でさへもある。これに對して今自選を行ふは予にとつて、實は興味も意義もともに比較的少い。故に予は『しがらみ』からはその選數も少くし、只同集大體

の面影を示すを以て滿足することにした。又その多くも外生活の變化に伴つて詠んだ歌を取つた。『しがらみ』の選に於てかく多少態度を變じたのも、歌數をわざと減じたのも、夫れはこの歌集が餘りに今の予に近いからで、充分な自選は他日に期したいためである。

○

予の歌には連作の歌が甚だ多い。これは幾分考へても宜いことだが、連作の多い結果は自選集を編むに際して、その連作一群のもつ味ひを存したいので、それを偏選することとなり、延いて自餘の歌については粗略に棄てたのも尠くない。殊に『しがらみ』からの選歌にはそれが多い。

尙予の歌について『馬鈴薯の花』から『林泉集』へ移る境目の歌風變化は餘り目立たぬが、それが『しがらみ』へ移ると、歌風の變化が自分ながら著しく目立つ氣がする。併しこれはその間の予の生活境遇の變化に伴

ふ現象であつて、大正五年秋から六年の夏までは、殆んど予は歌を作らないで暮した程だ。只その間少し出來かけたのが「歸住」の一聯で、これは大正八年に改作して發表したが、今は五年の部へ收める事にした。

○

『松の芽』の集名は慌てて選んだ。自選歌集だからその必要がないと思つて居たのだ。『松の芽』は林泉集の中から探した名で、大正三年「松の芽の匂ひに生るるこの浦の螢も見ずて我れ去らんとす」などと歌に詠んだこともあるが、恰度予の寓居の池畔の松原では、漸くその芽立ちが見えて來て居るので、觸目して之の名を選んだ。他の樹の芽立ちとは違つて、遠望しては目立たない新芽である。しかし近づいて見ると夫れが黑ずんだ青松葉の中から鮮かに黃緣の長い芽を、一筋に抽いて延び立つてゐるのは甚だ威勢がよい。而して頭に二つばかり少さい小豆色の毬を戴いてゐるのも、武骨

な松には不似合なはにかみを見付けた心地がされる。尙最も清快なのは發芽の延びると共に、それから强烈な脂の匂ひを吐いて、新鮮なる感覺を初夏に送ることである。やがて松の花の黃粉が、樹下砂上にこぼれ盡したほどの頃にもなれば、その長い松の芽は漸次に色を變へて成長し初める。續いて盛夏には青い枝の躰をなし、秋から冬に入ればもう黑い鱗皮を着けてまがふ方ない立派な枝幹の一部となる。故に予の歌も此芽の如く質實でありながら清新で匂ひ强く、而もそれが直ちに强靱な枝幹そのものに生長するやうになれば有難い。

○

この自選集は予に淨寫の暇がないので、大阪のアララギ會員岡田眞君により二月末に原歌集から淨寫して貰つた。最初六百首以上あつたが更に選した結果三百五十首となつたものを、再び同君に淨寫して貰つた。それ

を三度予が整理したから、本集はその原稿とは多少異つてゐる。兎に角岡田君の盡力を記して深謝する。

次に本集の出版の雜事については、三月中旬上京の際に改造社の人に直接會つて打合せたいと思つて居たが、赤彥茂吉兩君の自選集も同時に出るので、體裁から總ての雜事は兩君に御願ひすることにして歸西した。尙予の歌集はいつも予が在京せぬ時に刊行されるので、友人その他の手を煩すことが多い。赤彥茂吉兩君には甚だ恐縮であるが有難い厄みである。

今日は新曆四月の二十一日。晝まへ日は少しく曇つて居るが、裏の崖上の他家の庭園一杯に咲いた櫻花は風に散つて、花吹雪を頻りに予の二階の書齋にもたらして居る。

大正己丑十四年陽春四月下浣。攝津西宮市外鉾池山莊にて記す。

大正十四年五月十五日印刷
大正十四年五月二十日發行

松の芽
定價一圓八十錢

著者　中村憲吉
發行者　東京市芝區愛宕下町一丁目一番地　山本美
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　石川金太郎

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
櫻陰　東京八四〇二番
電話高輪四九九三番

株式會社　秀英舍印刷所

自選歌集

齋藤茂吉著	朝の螢	定價 一・五〇 送料 ・一八
島木赤彦著	十年	定價 一・五〇 送料 ・一八
古泉千樫著	川のほとり	定價 一・八〇 送料 ・一八
中村憲吉著	松の芽	定價 一・八〇 送料 ・一八
折口信夫著	海やまのあひだ	定價 一・八〇 送料 ・一八
木下利玄著	立春	定價 一・八〇 送料 ・一八

第九文化文庫